

もっと知ろう “陶”

17、守護石

水上浄円寺の境内西側に高さ1 m位の大きな石があります。かなり風化していますが、よく見ると「守護」と読めます。この石が守護石と呼ばれる石です。今回はこの守護石についてのお話です。

江戸時代のお話です。新月の夜、寺に泥棒が入りました。泥棒は大きな風呂敷に大量の盗品を包み、背中に背負って本堂から出てきました。誰にも気付かれていないようです。泥棒は「しめしめ、うまくいった。」と思うと急に喉の渇きを覚えました。そこで、境内脇の大きな石の前に風呂敷包みを下ろし、境内にある池の水で喉を潤していると、なにやらこちらを見られている気配を感じ、辺りを見渡すと目の前の秋葉堂の陰からこちらを見ている目がありました。住職が時々餌をやる野良猫の目です。「これは早く退散すべき」と泥棒は大きな石の所に戻り、急いで風呂敷包みを背負い立ち上がろうとしました。が、包みが重くて立ち上がれません。ここまで背負ってきたのに。何故か今は、何かに引っ張られているようで…どうしても立ち上がることができません。



泥棒は「おい、引っ張るな。手を離せ。」と思わず叫んでしまいました。すると、この声に住職が気づき、中から住職が出てきました。すると泥棒は包みを置いて這々の体で山中へ逃げて行ってしまいました。寺の宝物は全て無事でした。

その後、この話しが村人のうわさになると、「浄円寺は守護石が守ってござる。守護石には目がござる。」と語り継がれ、江戸時代から明治時代にかけては盗難除けの寺として遠くからもお詣りがあったといえます。

浄円寺開山の髓巖真徹禅師が好みの山水が、寺を泥棒から守ったことになります。禅師は、江南市の久昌寺から水上村に来て、岐呂の山の麓に龍王祠を建て、岩山とその間を縫って流れる水の清さを楽しんだといわれています。禅師が好んだ岩山のひとつが守護石になったのでした。

私も浄円寺が盗難除けの寺とは知りませんでした。今の時代なら、お詣りをすれば盗難除けというより振込み詐欺除けにご利益があるかもしれません。